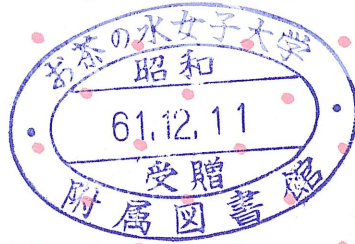


幼児の教育 12

1986

家庭・保育所・幼稚園



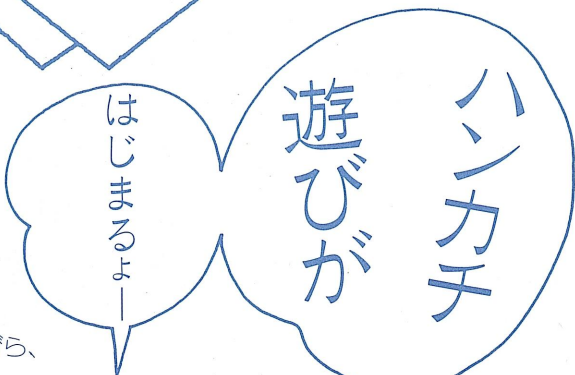
新刊!

新しいアイデア
ハンカチ遊び

タキガワ タカシ 著
滝川 恭子

A5判 178頁
定価1300円

先生は魔法使いです。
ハンカチをひらひらさせながら、
たのしく演技してください。
小さなハンカチが変身します。
子どもたちはただただ
びっくり。
マジックの小道具、ハンカ
チのたのしい遊びを
73種類も紹介
します。



●内容●

エプロン、ほうし、でんわ、トースター、アイロン、サイフ、ネクタイ、カメラ、おはな、ちょうちよ
かたつむり、ねずみ、ベンギン、ぶた、アイスクリーム、バナナ、にぎりずしなど73種類も紹介。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783代にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十五卷

第十二号

幼児の教育目次

—第八十五卷 第十二号—

© 1986

日本幼稚園協会

保育における「対等の対応」について……………高橋さやか…(4)

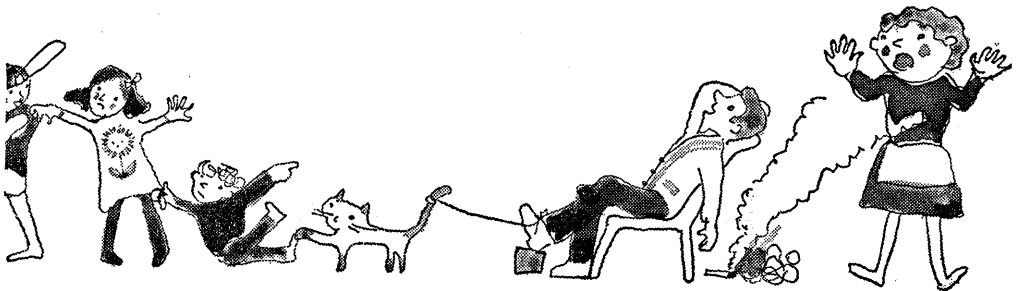
いつもと変わらずに……………津守 真…(8)

SF的読み解き 子どもという風景

第二十回 とりかえばや物語……………堀内 守…(12)

自然とのふれあい(その3) —秋のみり—……………斉藤 芳子…(22)

再び、保育の中の小さなこと、大切なこと(3)……………守永 英子…(28)



兔園隨筆④

出会い(その1)——ひばりはそらに——……………蕪木 寿江…(34)

オーストラリアのプレススクールがコンピュータを導入

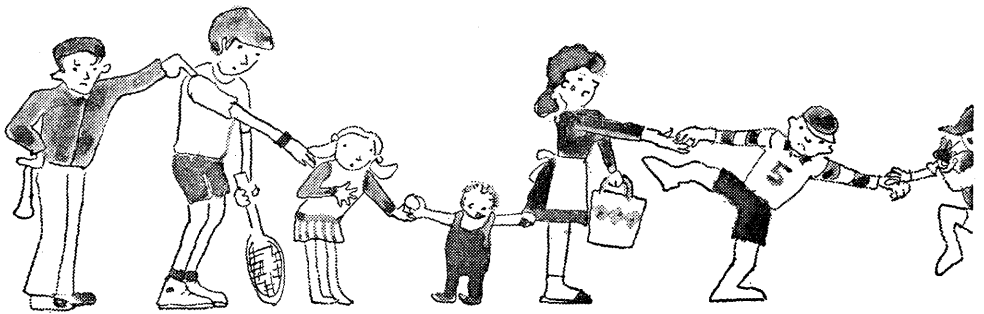
……………オーストラリア広報局…(39)

若いお母さんたちへ……………はるにれの会 橋本 都…(47)

夏のクリスマス……………小澤 誉子…(55)

第八十五卷目録……………(61)

カット・福田 理恵
編集部・小澤 誉子
土屋真美子



保育における「対等の対応」について

高橋 さやか

「子どもの目の高さで見、考えよう」

「子どもと同じ床——平面に立って」

「ともに生きよう」 等々のことばがよく保育の実践の場で聞かれ、また語られる。

上から見下し、あるいは遠く先行して、下から引き上げ、あるいはついてくるように急がせる。……ともすればそうなり勝ちな教育者側の反省をこめ、まことに良心的に、シビアにこれらのことばがとりあげられる。それはつまり、子どもを尊重し、できるだけ子どもをおとなと同等に扱い、子どももまた一人前の人格者であることを認めよう、という意図をもつものと考えられる。

しかし、これらのことば、また、このような考え方に、何かしら本当でない、どこかに錯誤があるように思えるのは、筆者の至らなさゆえであるろうか。

ともに生きる、ということについては、とやかくいう余地はない。しかし、あまりにあたりまえすぎて、どういう生き方なのか、案外にぼやけてしまう。子どものうしろからつ

いて走り、いつもいつも転びはしないか脱線するのではないか、と案じているのも、ともに生きることになる……なるのか、あるいはならないのか。泣くときともに泣き、笑うときともに笑っていれば、ともに生きているのだろうか。

時間と空間を共有する——同時に同じ平面・同じひろがりの中にいっしょにいていっしょに生活する、ということはわかりやすい。ところが、同じ平面に立っていても、おとなと子どもとは、背丈も体重も身のこなしもちがう。目の高さ、従って視野が及ぶところもちがう。考え方も、ものごとについての判断・評価も、ちがう。

同じであろう、とするよりも、ちがうところを確かに認識することの方が大切である。すでに子どもの時期を過ぎてしまったおとなが、子どもと同様のあり様を確保するのは容易ではない。子どもの目の高さで見ると常時身をかがめて見ることにいろいろな意味での無理がある。鬼ごっこやかかけっこをして全力疾走をすれば、大ていの保育者は子どもより早いであろうが、疲れることもまた子どもより早いであろう。おとなは子どもよりも、判断力や思考力、鑑賞したり批判したりする力が優れているかもしれない。より長い年月を重ねてきた経験がもたらしたものは小さくはない。しかし、子どもの方が感覚が新鮮であるがゆえに鋭敏、的確であったり、体重が軽いだけ身ごなしが円滑である場合も、決して少ないものではない。

要するに、子どもがもっているもので、おとながすでに失ったものもあり、おとながすでに習得・獲得しているもので子どもがまだもないものもある。子どもとおとな

とは、結局異質な存在者である。

おとなと子どもとの間には、どうしても、対立があり、抵抗反撥が生ずる。

対等の対応とは、一致するように同調するようにことを運び配慮することではなく、相違も含めて、相互に相手を認めあうことから出発するはずである。

子どもと対等に対応することは、保育者として当然に心掛けなければならないが、それは子どもに依存し、子どもの行動を待ち、子どもに恃むことではない。

保育者は、子どもに対して積極的に精一杯の活動をすべきである。

一般論として、保育者の方が、知識や、技術や、体力について、もっているものは優っている。しかし、忘れるわけにゆかないことは、子どもは常なる現在、常なる此の処ところにのみ生きる者、過去によらず、将来を思うことのない存在者であるということである。子どもが、成長期の間であるということはそういうことであり、現在と此処における充実以外に、子どもの生命力の働く余地はない。おとなが過去を顧りみ、将来への配慮をすることで、子どもの現在の成長を阻害することは許されない、それは成長しつづける生命のいとなみそのものを抑圧制止することになる。この事実を認める以上、子どものものである連続的に発揮される瞬発力の強力さに、大方のおとなの優位優越性も、どれほど力をもち得ないことを、おとなは思い知ることになる。

おとなである保育者は、全心全力をあげて自分の identity を確立し、この強力な子どもの現在を充実させるいとなみに立ち向い、参加しなければならぬ。

子どもの現在の充実を阻害しない、ただそれだけの思い上がりがあるなら、保育者はむしろ、自分のある限りの能力を子どもに提供すべきである。子どもは、本当は素直に、おとなに学び、おとなの提供するものをうけ入れ、おとなに従うものなのである。子どもの方では、実は、おとなの優位を知らず知らずのうちにも認めており、おとなや、自分より先に存在しているものに適応することにおいて、その時その時の自分の充実をちかちかとしてい

る。
若し、保育者がアイデンティティをもっていないなら、どうして子どもが彼自身のアイデンティティを獲得することができよう。他者と異なる自分を見出してこそ、自分が自分であることの確認もできるのである。

子どもとちがう自分をはっきりと子どもに認めさせることによってはじめて、保育者は子どもと対等に対応することができる。

保育者が保育の専門家であるよりどころは、成長しつづける子どもの生命のいとなみを抑圧制止することなしに、子どもに対して自分自身、全心を尽くした活動であるか否かにかかっている。

(西南女学院)

いつもと変わらずに

津守 真

夏休みのあと、新学期を迎える前の晩、久しぶりの子どもたちとの再会を思い、心落ち着かずに過した。殊に今年は、夏休みになる前に私はイスラエルに旅行をしたので、あの子は、あの親は、どのような表情で学校にくるだろうかと、長い不在のあとの心もとなさを感じていた。しかし、それと共に、子どもたちや親たちのさまざまなき動きの中に再び身を置いたのしきをも覚え、たとえどんな予期し

ないことがあるうとも、自分もその中のひとりとなり、生きた人間として交わってゆこうと心の奥に覚悟をきめた。

夜の暗闇の中で自らに語ることは、昼間の光の中でたしかなものとなって展開することは、いつも経験することである。

翌朝、新学期最初の日、子どもたちは親たちと、次々に、前進的な活気にみちた表情で門から入ってくる。その間に、いつのまに

か、私もその中のひとりになっている。そして間もなく、子どもたちのざわめきと人の往きかいに、庭も室内も、いつもと変らぬ賑やかさに沸き立った。

いつもと変らない生活がくり返されるといふのは、人間の幸福の基本的要素なのだと思う。

だが、こまかいことをいえば、その中にも、いつもと違うことがどの子どもにもある。

Oくんは門からはいつてくるとき、母親につかまって、私をみて人みしりのようにためらう。私の方から近づくと圧迫感を与えるように思えて、砂場の縁に腰をおろしたままOくんと目を合わせる。Oくんが母親と共に近くまで歩いてきたとき、私は立って迎えると、私の手につかまって室内にはいつてくる。この前私カナダにいったときには、それまで私に親しんでいたOくんとの間柄を回復する

のに何週間もかかったが、今回は無事に、Oくんとの交わりを再開することができた。

Tくんも、門の外側でうろうろしていて、すぐに入ってこない。母親も赤ん坊を背負って、ゆっくりと見ている。私は木のかげから、半分目を合わせたりかくれたりしていると、自分から中に入って門をしめ、ひとりではいつてくる。

Kくんは、午後になって私をみつけると、いつものように砂場で私とひと遊びしてから、室内の滑り台でボールを下から投げて、上にいる私に受けとらせることをくり返す。これはもう何ヵ月も、Kくんが私と遊びはじめるときの仕方である。今日は最初に、いつものボールを滑り台の下から何度か投げて後、それを仕舞いにいつて、それから空気の抜けたボールを持ってきた。いつもと違う遊びをはじめると言うみたいである。次に、

両手に赤と黄の中位のサイズのボールをひとつずつ持ってきて、滑り台の下から何度も投げける。自分のと私のと二人分のボールを意識して運んでいるように思われる。何にでも、自分の力を精一杯に出して挑戦するようになっているKくんは、それから壁際につき重ねてある箱積木の一番上から、自分が抱えられるだけの大きさの積木を持っておりて、幾つか床につんでいった。自分に持てない大きさの積木になったとき、私をよびにきて、それをおろさせた。いつもと同じパターンで遊びが始まった。こどものエネルギーはその内容をかえている。

先学期の終りに、このKくんのことから「子どもの自己実現と保育者の自己実現」について、八月号に書いて以来、私は、これは逆のタイプの自己実現をする子どもに注目をする必要を感じていた。自分の力を精一杯

に出す場合を実の自己実現と言うとすれば、嘘の自己実現と言えようなタイプである。

前者の子どもが、挑戦する対象を見つけて、挫折しながらも保育者に助けられてそれを実現してゆくのに対して、後者の子どもは、何もしないことを楽しみ、人目につかない周縁から庭の真中で遊ぶ子どもを眺めたりしている。後者の子どもに対しては、おとなは皆の中にひきいれる試みに力を注ぎがちになるが、この子どもたちは、おとなの圧力を察知すると、どんな誘いをも拒否する。しかし、おとながその子どものあり方を、これでいいのだと思つて、一緒に片隅に坐っていると、静かで繊細な子どもの世界がこちらにも伝わって、世界が控え目に、違つて見えてくる。そういう子どもたちが、私のまわりに何人もいる。

Yちゃんはそういう子どものひとりであ

る。ところが、Yちゃんは、新学期の最初の日に、部屋の真中を歩いている。人をはつきりと見て笑う。いくらかふとったようでもある。夏休み中、よく食べたのだと母親は明るく笑う。相変らずぶらぶら歩くことが多いのだが、いきいきとした張りを感じさせられる。この子どもなりに、気持よく生きられる日が増すとよいと思う。

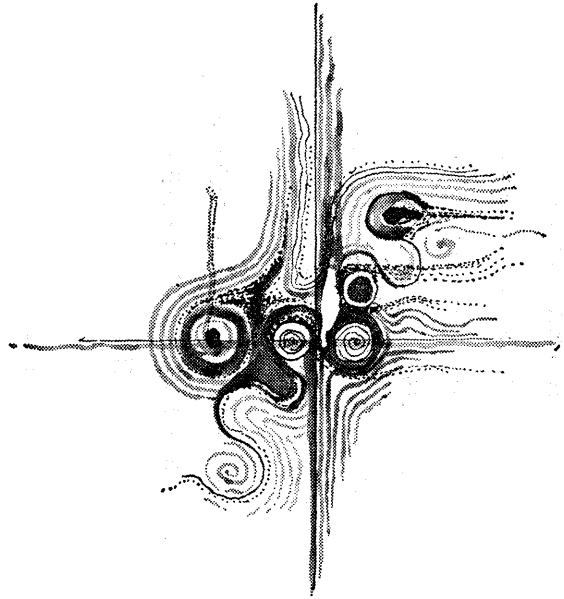
母親たちも久しぶりに会って、いつもと変らずにみんなが一緒になれたことをよるこび合ったと、帰りがけに話してくれた。

しばらく互いに会わなかった後も、いつもと変らないお互い同士として再会したいという願いは、だれの心にもあるのだろうと思う。いつもと変らわずにというのは、前と同じ状態のまま出会うことではないし、同じ生活パターンを保ちつづけることでもない。保育

においては、子どもがエネルギーにみちている点でいつもと同じなのであり、子どもに应答する私共も、子どもによって生きた人間となりうることでいつもと変らないのである。母親たちの張りのある姿を見ると、夏休み中、子どもと一緒に取り組んで生活していただろう様子が想像される。

子どももおとなも、いつもと変わらずに、子どもによって原点に立ち返らされて、生きた人間となりうるならば、新しい学期も、保育の場は生命的に展開してゆくであろう。

(愛育養護学校)



北風と太陽

旅人のオーバーをどちらが早く脱がすことができるかをめぐって、風と太陽が競争する話があった。絵本で出会ったのが最初である。

北風がこんな姿をしているのだということを初めて教わった感じで、北風が口をとがらせて風を吹き出している絵のことがまだ記憶に残っている。

旅人の姿はいささか奇妙であった。北風が吹きつけている絵では旅人は帽子をおさえ、必死になって自分のからだを曲げていた。もちろん顔は見えなかった。

太陽が北風と交替し、旅人はオーバーを脱いだ。その絵は、意外にも日本人の顔ではなかった。あたたかいというよりは暑いといった顔つきで、顔の汗をぬぐっているその顔は、年寄りの人物に見えた。

その後、この絵を確かめたわけではないから、くわしいことはわからない。講談社の絵本だったような気がする。

北風と太陽が競ったのも変だった。あまり必然性がな

第20回 とりかえばや物語

堀内 守

いように思われたからである。両者の対話の口調も変った。くわしいことは忘れたが、雰囲気からいって、北風は男性だったし、太陽も男性だった。

「どれ、こんどはぼくにやらせてごらん」などと太陽が言っていた。

この言い方が気になった。今にして思えば、「どれ」という接続詞は子どものことではないように思える。

「じゃあ」とか「それじゃあ」ぐらいではなからうか。

「どれ」が変に思えたのは、近くの老婆たちが何かを始めるに当って「どれどれ」と言うのがふつうだったからである。「やらせてごらん」も変だった。この余裕ある口調は、最初から太陽の勝ちを予想しているように響かないか。勝負を競っている緊迫感がないのではなからうか。初めから北風を呑んでかかっているようだ。

いろいろ理屈をつけたが、いずれもその時ぼんやり感じたものをのちになってからだどり返してのことである。一瞬そんなことを感じて、子どもはこういう物語にすぐに引っぱり込まれていく。

もうひとつ、子ども心にふしぎに感じたのは、北風の方がせつ、かちで、太陽の方が鷹揚なキャラクターになっていたことである。それは絵本の絵柄にもそっくり表われていた。北風は黒っぽく、荒々しい。太陽は丸やかで、赤い。これでは最初から「勝負あった」といった感じである。

対比の図

この対比は意外と古いのではないか。もともと、この物語がイソップ物語にあつたとすると、当然古いことになるわけだが、問題はこの「古さ」が現代にもそのまま存在するほど続いているというところにある。

旅人が上着まで脱ぎ、汗をぬぐっているのを見て、太陽は北風に向かい何と言ったらいちばんよいのだろうか。

「ほら、ごらん、やっぱりぼくの勝ちだ」

「ごらんのとおりで」

などと語るべきか。

それともニヤリと笑って、含み笑いでもして、あるいは知らんぷりをしてうそぶくべきだろうか。いろいろありうる。

それに応じて、北風の反応も変わってくるのではないか。

「なるほど、やっぱり君の方が勝ったね。ぼくはカブトをぬぐよ」

ああ、キザだ。いかにも子どもの会話に近づけているようである。こういう言い方はオトナのものである。子どもとはたぶんこういうものであると思ひ込んだオトナが書いたセリフである。

北風は黙すべきだろうか。それとも怒って、その場から姿を消してしまふべきだろうか。

これもいろいろな場合がありうるわけだ。

オトコ・オンナ

ところが、明治初期の翻訳本を見ると、話はだいぶ変わってくる。

北風は力の隠喩のようなのである。太陽は愛の神の隠喩のようなのである。全体の文脈は、物語を楽しむというよりは教訓調に近くなっているから、その間隙を埋めるためにこういう隠喩が必要になってくるのだろう。

面白いことに、この場合の北風は荒々しい男、筋肉の盛りあがった男——仁王さまのような顔つき——に描かれている。これに対して、太陽は福ぶくしい。これはどう考えても女神である。

この対比は天界が舞台になっている。だから、何やらスサノオとアマテラスの関係にも似てくる。天津罪を犯した北風は、勝負に破れて追放の運命にでも会いそうな妻い顔である。風は彼がわきにかかえている大きな袋から吹き出している。それを太陽はにこやかに見やっている。

旅人は、地上の世界の人間だから、北風や太陽よりもはるかに小型に描かれている。彼が絵の中央に登場することはない。オーバーを脱いでいるのもページの片すみにおいてである。さし絵がそうなのである。

北風や太陽の位置から、彼が上着を脱いだのを見下したような絵だ。

勝負に負けた北風のくやしそうな顔。それは見ようによつては憤怒の形相物凄く、といった感じにも見えるし、それまでの荒々しさが突然その強さを喪つて、ヘナヘナとなる寸前の転換点をあらわしているようにも見えるのだ。

これをどう解するかによつて、女神の表情も異なつて見えてくる。破れた以上、とつととその場を立ち去れ、といわんばかりに女傑然として立っているようにも見え、二度とこのような挑戦をするのではないぞとなしなめているようにも見えてくる。

親と子、姉と弟

かりに北風を親とし、太陽を子としてみよう。これは落語の世界に近くなる。生一本な親とこまちゃくれた子の対称となる。

北風が子で、太陽が親だとする。これでは物語の迫力

が出てこない。

北風と太陽とは、やはり何らかのつながりがありながら、一方が他方をともに必要とするような関係にある。ばらばらだったら、この物語りは生じないからである。友だち同士でもダメであろう。

いろいろと仮託してみよう。

この北風と太陽の關係に類似したものを並べてみることにする。

北風を孫悟空に置き換え、太陽をオシヤカ様に置き換えてみる。宇宙の果てまで飛んでいったつもりの孫悟空が実はオシヤカ様の五本の指の中を超え出ることができなかったとする話。あれと近似しているようにも思えてくる。

北風を厨子王に置き換え、太陽を安寿に置き換える。

森鷗外の『山椒太夫』におけるこの両者の關係は、しかるべき類似を示している。

安寿が男装を強いられることによって、厨子王といっしょに山の仕事に行くのを許されるというのも見のがせ

ない。

北風小僧

仁王のような形相をしていた北風も変身をする。「子どもは風の子」という文脈が成立すると、北風まで小僧の表象をもつにいたるだろう。そして、ちゃんと「北風小僧」というニックネームと「寒太郎」という名前までちょうだいすることになる。

もはや筋肉隆々ではなく、小鹿のようにすばしく駆けめぐる仲間に加えられるわけだ。

「小僧」は、ただ小さいだけの表象ではない。機敏であるのが特徴である。こういう点を考慮にされると、北風と太陽の物語は、幾通りもの変移を続けていくといってもよいようである。

「小僧」の表象を与えられたとたん、オトコ・オンナという根痕は消される。いや、背景にしりぞいてしまう。

無性というよりも、中性に近づいていく。だから「寒太郎」は、一般には男の子のようでありながら、元氣のよ

い、気っ風のよい女の子を包み込むだけのゆとりをもっている。

メディアとしての旅人

旅人の正体は何だろう。商人のようでもあり、職人のようでもある。彼は荷物を持ち、オーバーを着ていなければならぬ。この場合のオーバーは、彼のシンボルになっている。

旅人はオーバーをかたくあわせて、襟を立てる。北風が力をつくせばつくすほどオーバーを脱ぐはずはない。当然のことである。

この物語において旅人は実験台の役割を演じてみせる。彼が依怙地になったならこの物語は平凡なものに終わる。初めに北風が吹くからよいようなもの、初めに太陽が温かい日ざしを送り、彼にオーバーを脱がせたあとで、北風がびゅーびゅーと吹いたとしたらどうなる。

この旅人の、オーバーを脱ぎ、汗をぬぐっている時の顔の表情は無表情ではない。暑さでふーふー言っている

のでもなければ、重いオーバーにうんざりしているのではない。まずは心地よげに笑みを浮かべていなければならぬ。

カンぐれば、彼は太陽の予想したとおりに、いや太陽の期待したとおりに、にっこりとオーバーを脱いでくれないければサマにならないのである。だから、実験台でありながら、このドラマにおいては重要な役割をになっている。いうなれば、旅人が北風と太陽の賭けを生き生きとさせるメディア（霊媒）なのである。ほとんどセリフもない役割でありながら、パントマイムよろしく悠々とオーバーを脱いで見せる役まわりなのである。

ドラマとして見れば、旅人の方がシテになる。演技もそれだけむずかしい。

どこから来て、どこへ行くのか、この旅人の由来はさだかではない。たまたまそこに来たように、太陽と北風の賭けのことが終わったそのとき、びたりと姿をあらわさなければならぬのである。しかも、観客には偶然そこを通りかかったように見せかけながら。

旅人Ⅱ赤ちゃん？

旅人を赤ちゃんだとする見解も成り立つ。この場合、

北風はイジワルな人、太陽は母ということになる——とすると平凡すぎる。ここは大岡越前の物語——実は中国あたりから渡来した物語をネタにしている——に出てくる実子の判別の話に近づけてもよろしい。

自分こそホントの母親だと名乗る二人の女が大岡越前の眼前で子どもの手を引っぱるといふ話だ。ありそうもない話のようであるが、あの判決は意表をついていくから物語としては面白くなる。あの場合の子は、旅人の位置とほぼ重なる。

赤ん坊を抱いて自慢してみるしぐさがある。「いい顔をしてごらん」というのがそれである。あまり赤ん坊が小さいときは「いい顔」もできないのだが、ただ、赤ん坊は見かけ上たしかに相を変えてみせるから「あら、いい顔をしたね」などということになる。この場合の「いい顔」とは、親の期待に応えるような表情に限りなく近

いようだ。

だれもがそう思っている。そこで子どもを育てることの楽しみも生まれてくる。

北風と太陽の話にひきつけられ、赤ちゃんがむずかたり、泣いたりしたときにどうするか。北風のように向かうか、太陽のように向かうか。この境目はかなりきわどいではなからうか。

ミルクと母乳

北風を人工のミルクにたとえ、太陽を母乳にたとえた人がいる。

いろいろなたとえが可能なのだと驚く。しかし、このようなたとえをいいかげんに扱うのももったいない話である。あの旅人はセリフなされた。ということは、高度なパントマイムによる演技を必要とするということであつた。

私たちは赤ちゃんや幼児の表情やしぐさから意味を読みとる。それがことばを介すときもあれば、ことばが不

充分で、しぐさの方が雄弁に語ってくる場合もある。これらの解説はのっぴきならぬ関係であることが多い。

北風は損な役まわりのようにも見える。なぜ「北風」でなければいけなかったのだろうか。西風でも、東風でも同じではないかという人もあろう。しかし、前にのべたように、これらの風では、「北風小僧」のように、変身することがないのである。激しい、しるしつきの「北風」なるがゆえに、かえって「北風小僧の寒太郎」というように、土俗的な姿に変身可能だった。これとの対比において太陽は、やわらかな陽ざしとして意味をもってくる。西風や南風との対比ということになると、太陽の役割はおのずから変わらざるをえなくなる。だって、太陽はぎらつく太陽であることもあるし、逆に薄日の場合だってありうるからである。北風と薄日では勝負も成り立たないだろう。

よく考えると、オーバーを脱がすだけでなく、上着を脱がせ、シャツも脱がせるような太陽だってありうるのである。それなのに、それらが表に出てこないのは、北

風が力で勝負をしたからである。ちょうど、それとは正反対のところに太陽が位置つき、太陽の役割は力と反対の表象であることを文脈上約束させられている。その期待にそって太陽はやわらかに、しかもオーバーを脱がすだけのあたたかさで旅人に向かい合うのである。

話がうまくできていて、余分な疑問を生み出さないようにはたらくのは、この対比がピタリときまっているからにほかならない。

だから、太陽と北風でなくとも、こういう対立関係にある存在ならば、その組み合わせで置き換えることもできるわけだ。

交換可能

ぎらぎらと照りつける太陽を一方に置き、他方にそよ風を置いてみよ。真夏の太陽に対するクーラーは商品名を「そよ風」とか「高原」とか命名されているのもうなずける。反対に、冬の寒い日、部屋の中の暖房装置の商品は「だんろ」だったり、「暖」だったりすることもある。

る。

こうして、現代における「とりかえば物語」の例にはこと欠かない。

ある次元では「北風」を「いじめっ子」と見なすこともできる。しかし、「北風」をなくしてしまい、すべてを「太陽」だけにしてしまうと、私たちの期待どおりに「よい子」ばかりになるかという点、そうではない。「太陽」だけになると、「太陽」自体が幾通りもの形相を生み出す。ぎらつく太陽になったり、薄日の太陽になったり。

むしろ、私たちは「北風」が、「北風小僧」に変身したりする可能性の方に目を向けるべきではないだろうか。そうになると、当然太陽も「金色夜叉」ぐらいにパランスをとって立ちあらわれることになる。この辺のふしぎなくみは、一方がつねに主役で他方が脇役というような関係ではなく、変動相場制のようにそれぞれの立場が交換可能であることを示しているのではないか。

さし絵

北風と太陽というイソップ物語のさし絵は、この辺の機微をあらわしている。短かい物語だから、さし絵画家にとっては大して困難な絵ではないようにも見える。ところが、さまざま（この物語に附された）さし絵を眺めて、見くらべてみると、さし絵を描くにはかなりの苦心が必要であったことがわかってくる。

「北風と太陽」の原型をどうつかむか。これが第一の問題である。対等か。それとも、北風が一本気で、せっかちであるのに、太陽が寛容で、「オトナ」である、というようにとらえるか。いや、逆に、北風を魔性の物とし、太陽を神性なるものとすべきか。

第二は審美的要素である。右のような対立をロコツに表現せず、読者の理解度にふさわしく見映えのする絵柄に仕立てあげなければならぬからである。フォークロア（民俗）風の、太々とした絵柄にするか、メルヒェン風の淡い絵柄にすべきか。

第三は、双方の「顔」の表情の描き分けである。オニ

とオカメ、オカメとヒョットコのように、さまざまな原型がある。観音さまと夜叉、仏と羅刹のごとき、あるいは春と修羅のごとき対照も掘り起こされるからである。

こうなると、さし絵のいかんによって、この物語は深みを変えてくる。別の言い方をすれば、構成の緊密さが欠けてきて、その隙き間から、いろいろな解釈が湧き起こってくるのである。

さし絵とは、本文を主とした本に補助的に附された絵というようなニュアンスを含んでいる。しかし、それはことばの上の表層にすぎない。文章よりも絵の方が強い印象を与えることもありうるのだ。したがって、さし絵は本文と離れ、自己主張をはじめめる。あたかも本文は、写真に附された説明のことばのように従の立場になり、絵の方が主の立場に立ってきたりした。

かたのもの、もうひとつの世界がその間隙からかいま見られる。いかなる漠然たるものにせよ、非地上的な観念として立ちあらわれたり、超越的に見えたりするので、地表べったりの現実主義の枠は揺らぎはじめ。

こうなると、「北風と太陽」という物語（ある本では「太陽と北風」というように順序までが文脈に従って整えられているが）は、さまざまの掟や秘儀を含んだ怪談のように思われてくる。

両者の対話のきっかけになっているのは無聊むちようのようでもある。退屈なのである。賭けによる無聊の克服。そのため選ばれた実験台が旅人。「実験台」は、なぶりものでもあるわけだ。

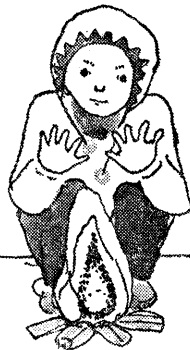
少々背すじが寒くなるような怪談が紡つむぎ出されてくるような気もする。

（名古屋大学）

自然とのふれあい (その3)

秋のみおり

斉藤 芳子



お店ごっこをする前に、町の商店街を見学
に園児たちと出かけました。

豊かな実りの秋を迎え、八百屋、果物屋の
店先は、色とりどりに美しく果物や野菜が並
べられています。

赤、青、黄色のりんごのいろいろ、大きい
みかん、小さいみかん、つややかな柿の色、

ごぼう、人蔘、とろろいもなどの長い根の土
の中の実りなど、長さくらべの様にならべら
れた八百屋などを見て、「きんぴらやとろろ
ご飯をつくるのよ」と先生の話をきいてびっ
くりしています。

木の実り、畑の実り、土の中の実りなど、
いろいろな品物をじっくり見て、「食べたい

なア」「これなんだろう」などにぎやかな話し声ははずみずみ。

幼稚園に帰ってから、粘土で作るもの、折紙で作るもの、絵を描くもの、それぞれもおもいのお店やさんになって、商品製作をはじめていきます。

「先生、絵見てちょうだい。私かいたの」お店にあった果物が、木になっているのを描いています。

ぶどう棚のような畑の棚に、ぶどうの房のように、茶色い実がぶらさがっています。

「これなにがなっているの？」

「それね おいもなの」

さつまいも棚にいっぱいぶら下がっている「さつまいも」の絵を描いて、満足気にここにこくと答えています。

考えてみれば、子どものうち何人が、土の

中の実りを見ているだろうか？ 否、地上の木の実りさえ、畑の実りさえ、実際に見知っている子は何人いるだろう？ と考えた時、今まで子どもに話していること、教えてきたことが、「知っているもの」とした大人の概念からなされていたり、稲一本を見せて広い田んぼの話をしたりしてきたことが、果たして十分子どもに理解されていただろうか？ と急に反省され心配になって来ました。

幼児の教育はもっと具体的で、体験的でないければならないとつくづく考えました。

そして三六年頃から二キロ程はなれたところにある農場に「さつまいも掘」の遠足にゆくことにし、途中、田んぼや、畑、柿の木など秋の実りの見られる裏道を歩いて、車の通る道はさけるようにしました。

年少を先頭に年長を後に、全園児でゆっくりゆっくり歩きながら、広々とした田んぼの刈り入れを見たり、道端に飛び出すいなごを取ったりして列を飛び出してゆきます。

「いなごは食べられるのよ、戦争中はお魚もお肉もなくて、食べ物も十分食べられなかったから、栄養不足で、子どもは丈夫に大きくなれないので、小学生も皆でいなご取りをして、羽根と足を取ってつくだににして、おべんとうのおかずにしたのよ」

「かわいそう」

「気もち悪い」

「でもいなごはお百姓さんが一所懸命つくっている稲をどんだん食べる害虫だから、お米がすくなくなると心配して、大人も子どももお手伝いして取ったのよ」

「そうか、悪い虫なら仕方ないね」

休憩しながらお話を聞き、取り残された「か

かし」を見て、雀やからすなどの害鳥の話もききました。

青空に映える真赤な柿を見上げながら、またあるけあるけの観察です。下を見れば、畑に大根、人蔘、茄子、白菜などの葉が見えます。

「先生 あそこにも柿が見える」

「あれッ 袋かぶせたの何」と梨棚を見て、質問をする子もいます。

次々と珍しい田園風景に、お店とちがう秋の実り、珍しい実際を見て、大声を出してガヤガヤワイワイはしゃいでいます。

四〇分位で一人の落伍者もなく、二キロの道を歩いて農場へ到着しました。

牧草の広場に坐って、全員の到着を待ち、先生の案内で畜舎、鶏舎、果樹畑、野菜畑などを見て廻ります。

ジャージの乳牛の前では、地につかンばか

りに大きく張った乳房を見て

「先生 牛のおっぱい大きいね」

「お乳四つもあるの、飲みたいなア」

など、お話が絶えません。

豚小屋の前では、大きな母豚が横になって十二匹の可愛い仔豚にお乳を飲ませているのを見ながら、仔豚の数と、乳房の数をかぞえている子もいます。

クローバーの原につながれて野草の実りを食べている山羊を追って、注意されている子もいます。

鶏舎の中で、産卵箱の中のたまたま産みだての卵を手にとった女の子が、

「あつ先生、この卵暖かい、ゆで卵生んだ」と大喜びをしています。

サイロの側で、冬雪が降って、秋の実りも牧草もサイロいっぱい、牧草やとうもろこ

しや牛などの食物を干して、蓄えて、冬の間食べていることをお話しします。

果樹畑にゆき、根元に落ちた固いくるみの実や、栗いがの皮をむきながら、

「栗 二つ入っていた、三つもある」などと大声をあげて告げています。

梨棚の下に立って、袋かけしたままの梨をそっと握って「大きいのが入っている」とつぶやいているので、袋を破って見せてやると、満足そうに、皆でにこにこしています。

野菜畑では、土の中の実りをたずねて、葉っぱをおぼえ、大根、人蔘、玉葱などを一本宛抜かせてもらいました。

一巡してから、草原に腰を下し、お弁当にします。

「お米、お野菜、果物と、

秋はうれしい、実り時。

実りの秋の楽しさを、

感謝しましょう うたいましょう」

何時もより心をこめて、力いっぱい歌っているように聞こえます。

食事の休憩の終わったころ一人一人持参の移植ペラを手に手に持って「さつまいも畑」に入ります。さつまいもの自然のままの实り方を、畑の様子から知らせたいので、いもづるも茎もそのままなので、畑に入るのから大変です。

つる返しをして入る道をさがし、うねが見つかると、砂あそびのように、あちこちの土を握りまわして「おいも」をさがします。

いもづるの茎の下の土の中にしか「おいも」は実らないことを話します。と、やがて土の中から、薄桃色のおいもが見えてきて、

あちこちから歓声が聞こえてきます。

二メートル程あるいもづるを、綱引のように四、五人で、よいしょよいしょとうねから引きはなしている子、茎の下を二、三人で固い土を力いっぱい掘り起して、さつまいもを掘り起している子、とにかく力いっぱい一所懸命です。赤くなったてのひらの豆を見せにくる子もいます。

長いいもづるを比較してびっくりしたり、大きいおいも、小さいおいもを見せ合ったり、大きいおいもは一つるに三個位、小さいおいもは一つるに七個位実っていることを発見しました。

掘ったおいもは、畑のそばの広っぱに次々持って来て、見る見る積み重なるおいもの山にますます張り切っています。

惜しそうに自分の掘ったおいもを撫でまわして土を払いそっと置いていく子、走って来

て「僕の掘ったおいもどれ？ この一番大きいのだね」と見に来る子もいます。

帰りには、大きいおいもと小さいおいもを組合せて、少しずつランドセルに入れさせます。「お家のお土産にして、天ぷらや、お汁にして食べてね」と話します。

残ったおいもはダンボール箱に入れて幼稚園に持ち帰り、翌日ふかして、牛乳のおやつに皆で楽しく味わいます。

翌日の保育はもっぱら「いも掘遠足」の新しい発見や経験の話題で、先生が発言の整理に困る程です。

食べられない小粒のピンクのいもは足をつけて仔豚になり、またいも判をつくって、スタンプ遊びに興じたりしています。

いもづるの茎と葉っぱで、ペンダントやバ

ルトを作って身体につけ遊んでいます。

持ち帰った自然物を教材に一日楽しんでました。

絵も観察したいろいろの秋の実りの絵が多く、もはや木の枝にぶらさがったおいもの絵もなく、畑のうねの上に緑のいもづるが描かれ、土の中に桃色のおいもが茎の根に連なって実っている絵がたくさん描かれていました。

四十年近く休むことなく、今でも続けている秋の実りの自然とふれあいながらの歩け歩きの遠足ですが、往復四キロ歩く頑張りとする中の一日の経験が、行事の中で一番忘れられない楽しさとして残っているようです。社会が文化的になるほど、交通が便利になる程、子どものために続けたい行事です。

(宮城県・聖光幼稚園)

再び、保育の中の小さなこと、大切なこと (3)

守 永 英 子

年長組になって、しばらくすると、大学のU先生に依頼されていた実験が始まった。一人ずつ別室に行き、U先生に示された絵を見て、お話を作る。子どもの遊んでいる様子を見ながら、行き易い状態の子どもに声をかけるのだが、女兒は、積極的に行くこうとする子どもが多いのに比べ、男児の中には、嫌がる子どももいる。

六月初めのその日は、K夫、N夫、T夫の三人のグループが、保育室の中で遊んでいた。絵をかいていて、誘いにくい状況であっ

たが、U先生の誘いに、三人の中では一番物おじしないK夫が応じた。K夫がU先生と別室に去った後、T夫が、私にそっと近づいて、小さな声で言った。「次は、ぼくにして！ N君より早くね」

私の心に、驚きと、とまどいと、喜びとが次々に広がった。実は、私は、T夫が、このような課題場面を忌避するのではないかと、思っていたのである。小学校に進み、課題に満ちた生活が始まったら、T夫はどうするだろうか。その思いが、昨年度の終り頃から、

私を不安に陥れていた。そのために、今のうちにしておかなければならないことは何か、私にやれることは何か、それは、私が頭を悩ませていた課題であった。

私は驚きと感動を抑えて、T夫に言った。

「それじゃ、U先生に、自分でそうお話ししたら……？」そう言いながら、T夫は、本当に自分で言えるだろうか、言えなかったら、私が助けて、その意を伝えた方がよいだろうか、など、いろいろと思いつくがらしていた。

しばらくして、K夫がU先生と戻ってくると、T夫は、自分からU先生に近づき、「今度は、ぼくにしてください」と、小さな声で、しかし、はっきりと言ったのである。

T夫は、三歳から通園している子どもであるが、おとなしく、声も小さい。年中組の終り頃は、年少組の時から一緒だった男児のグループの中に入って、活発にサッカーなども

するようになったが、内気な子どもで、私の不安には、充分、理由があった。

昨年度のことである。四歳児クラスも、二月下旬に入ると、年度末の忙しさに追われていた。子どもたちがそれぞれにやりかけた製作を、仕上げさせたいという思いも、その一つであるが、毎年、卒業する年長児へ、年中組から、手作りのプレゼントを贈ることになっている。又、ひなまつりを前にして、自分のおひなさまを作ろうという活動も始まる。

T夫は、いつもの仲間と、遊戯室で、サーカスごっこをしていたが、グループが保育室に戻ってきて、年長組へのプレゼント作りを始める時、一緒にやり始めた。しかし、他の子どもたちが仕上げても、T夫は、「失敗した」と、かいた絵を折りたたんで、その日はやめてしまった。

二月の末、M夫たちが、おひなさまの続き

をやり始めたので、作りたい人は、ひなまつりに間に合うように、声をかけた。五、六人が参加し、T夫も自分から加わった。しかしT夫は、おひなさまの顔を、小さく、いくつも書き直しては、自分で気に入らないらしく、とうとう紙は、かき損じて一杯になってしまった。思いがけない成り行きに、私は、とまどいながら、「気に入ったのできるまで、かいてもいいのよ」とT夫を励ました。代りの紙をあげたが、降園の時刻になって、その日は、それで終った。

プレゼント作りと、おひなさま作りと、引き続きいての、T夫のつまずきである。今まで気にかかっていたT夫の消極的な面が、一挙に現れて、私に課題をつきつけたようであった。

私は、T夫の気持をいろいろと思ひめぐらして、T夫が、おひなさまを作りたくないな

らば、その気持に添って、通させてあげるところがよいのではないか、と思った。が、T夫の気持が、もうひとつ、はっきりと捉え難い。

私は、T夫の母親に、T夫の気持を知る手がかりを求めた。母親は、「家では、『今日はできなかった』と気にして、やりたいと思っているようです」と、疑いもせず言う。本人に、作りたい気持があるならば、作り上げた喜びを味わわせてあげたい、と決心して誘ってみると、当然のように、あっさり「作る」と言う。しかし、「作る」というわりには、途中で庭に出された兎の方に行ってしまう、「やりかけで行っちゃった」と、私の方を気にする。紙をあげても、前回と同じに、いくつも、小さなゆがんだ円をかいては、ぐしゃぐしゃと消す。随分と手を貸し、声をかけながら、やっと出来上らせると、T

夫は、ほっとした様子であった。家では、「作ったよ」と、母親にうれしそうに告げたということだったが、私は釈然としなかった。

T夫は、やはり、おひなさま作りをしたくはなかったのではないか。T夫は、母親や教師の期待に応えたい、あるいは、応えねばならない、と思っただけだったのではないか。T夫が、おひなさま作りをやりたくないならば、自分の、「やりたくない気持」を、自分ではっきり捉えさせる方が、よいのではないか。T夫は、自分の気持をはっきり捉え、自分の気持に従った行動をとれることが、今は大切なのではないか。——さまざまに思いが、私の中に残った。

卒業式も近づいて、年長組へのプレゼントも次々に出来上り、五人を残すだけとなった。そのうち、HとMは、「今日はしない。

あとにする」と、庭に出て行った。YとAとT夫が、やり始めたが、T夫は、相変わらず、ぐずぐずと、黒一色で紙をこすり、紙に穴があいてしまう。次の紙も、少しかいては、まるめて捨てる。三枚目は、木や人をかきかけ、私がほっとしたのも束の間、くしゃくしゃにまるめてしまう。

年長組へのプレゼントは、卒業式の日、自分の作品を、年長組の子どもに手渡すので、全員が作ることになっている。

私は、じりじりする気持を抑えながら、「紙は沢山あるから、かき直しても大丈夫よ」と慰めた。T夫は、ぐずぐずしながら、小さな声で、「紙は沢山あるから、大丈夫だよね」とつぶやく。今まで、捉えにくいと思えたT夫であったが、T夫のぐずぐずとした動きに、気がのらないことが、ありありと見え、それでも、「あとでする」と言えないで、そ

の場に縛られているT夫の気持が、痛いほど感じられた。私は、胸がつまって、思わず、T夫を抱き寄せて、「かきたくないのね?」と優しく尋ねた。T夫は、黙ってうなずき、こらえていた涙があふれ出た。

作らなければ、プレゼントを持っていくとき、T夫は、どうするだろうか。他の子どもに、もう一つ作ってもらって、T夫に持たせようか、その時、T夫は、どんな気持になるだろうか。T夫が困らないような、プレゼントの渡し方が、工夫できるだろうか。——私の心は、いろいろな状況を思いめぐらし、困惑しながらも、その心配は、私が背負ってあげなければならぬ、と心に決めた。「かきたくなければ、かかなくてもいいわ。大丈夫なように、私が何とか考えるわ」今までのT夫の苦しさを考えると、私は、そう言わずには、いられなかった。

翌日、「あとにする」と言って、昨日しなかったHとMに、「今日しなれば、する日がなくなってしまうのよ」と告げた。二人がやり始めた頃、T夫がそばにきた。T夫の気持をはかり、迷いながら、そっと声をかけてみた。「どうする? かく?」

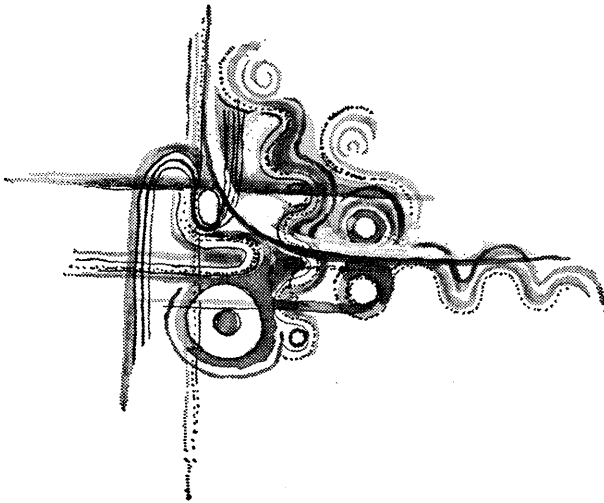
T夫は、はっきり「うん」と言って、さつさと、草むらの中に、二匹の虫をかき、あっさりと、手ぎわよく仕上げた。昨日まで、あれほど深刻に、私を悩ませたのが、うそのようであった。

次の日の、帰り際のT夫の支度は、とても早かった。今までは、コートのボタンをはめないまま、「ボタンをはめて、きちんと支度をしてね」という、クラス全体への注意にも、あまり反応しなかったT夫が、素早くコートを着て、自分から「はめて」と、そばにきたのである。心なしか、表情にも、親しみ

が感じられた。「Tちゃん、早いわ」と、ほめながら、ファスナーをはめてあげ、これを、「T夫の変化」と捉えていいだろうか？と心の中で繰り返した。

T夫は、自分の気持が理解されたと思ったとき、泣くことができ、気持が解放されたのであろうか。年長組になってからの、U先生への、積極的な働きかけは、やはりT夫の変化の証だったのではないかと思う。私の悩みも、やっとトンネルを抜け出たようである。

(お茶の水女子大附属幼稚園)



蕪木 寿江

積木のふたに書いてある

すごうひろしの文字……

めぐちゃんが見つけて 飛んできた

「えらい先生の名前が書いてある」って

いったい誰が書いたのだろう

この六歳の子どもたちの誰が……誰が……

みんなが頭をくつつけてじっと見ている

小さい丸い字で

ボールペンが少しかすれている



出 会 い

——ひばりはそらに——

わたし達があんまり悲しむから

いつの間にか先生の名前を

覚えてしまったのか

お母様方がその死を惜しむから

いつの間にか先生の名前が

離れなくなってしまうのか

親から子へ 子から子へ

生きつづけていく

すこうひろし

一人一人の幼い胸の中に 燃えつづけてい

く

すこうひろし

あ——二十一世紀の人

次の日の朝、真先きに部屋の隅に置かれてある床上積木のふたを取って抱き寄せた。話しかけているK夫^{*}の文字である。見なれたK夫の字だ——。ポールペンの先生は、「いたづらに動揺するんじゃない。私の指ではなくて、持し示す先を見なさい。肉体は滅びても精神（魂）は不滅である」と一所懸命に語りかけている。物にだけ執着する子どもとK夫を見ていたが、外見だけで心の動きを見ることができなかつたのか、とK夫に詫げる思いだ。卒園間近の三月八日のことだった。周郷先生が亡くなられたのが二月二十八日、市が



尾幼稚園でお話を拝聴したのが二月十四日、五回目のご講演で、ご父兄の間でも、「教育とは何なんだろう、人間とは——、生きるとは——」という真剣な自分自身への問いかけが続いていた。

先生を初めて知ったのは、先生がお茶の水女子大学附属幼稚園の園長を兼任なさった年（四十四年）の五月だった。当時、NHKで日曜毎に行なわれていた十時十五分からの、「十代と共に」という番組で、母の日にちなんで七、八人の高校生ぐらいの少年少女が先生を囲んで話をしていった。毎週見ていたのにその日に限って終る頃につけた画面に、

あなたは子供たちに愛を与えることはできるが、あなたのものの考えを与えることはできない。なぜなら、子供たちは子供たち自身のものな考えをもっているのだから。

あなたは子供たちのからだの世話をすること
はできるが、彼らの魂をそっくり飼いな
らすことはできない。なぜなら、彼らの魂は
明日という住み家に息づいているのだか
ら。

あなたは子供たちのようになろうとつとめて
もよいが、子供たちをあなたのようにしよ
うなどとしてはいけない。なぜなら、人生
は後向きにすすんでいくものでもないし、
昨日のままでもどまっているものでもない
のだから。

左から浮きでては右に消えていく文字を急
いで写した。周郷博訳、ペルシャの詩、とい
う最後の白い字を追っていった。「父母であ
ること」のこの詩が、「母と子の詩集」(國土
社)にでているのを知るまでに一年余りかか



った。七百余年前の詩が、そのまま先生の教
えであるような気がして機会あるごとに紹介
してきた。その本から次々とふれ合うものを
感じ、感性がよびさまされ、引きだされる思
いだった。「迷える一匹の小羊も、自分が求
めてさまよっていたから神さまは探して下さ
ったのだ」という先生のお話と合わせて、四
十三歳の迷える小羊ならぬ山羊は、その一つ
一つの詩の心に傾倒していった。

次の出会は翌月、キンダーおはなしえは
ん(フレール館)の六月号、吉田一穂(初
山滋画)の、『ひばりはそらに』の中に入っ
ていた解説書のような一枚の紙に書かれてあ
った文章であった。

——略——何を讀んだらいいのか、何を子ども
に読ませたらいいのか、この乱脈混乱の時代
に、読書についても、道案内風なものには必要
にちがいない。しかし、それは「あれやこれ

やの道」のことだろう。この「ひばりはそらに」に語られているのは、夜空にかがやく北極星を指さすような「この一つの道」をさし示す、人間の（人生の）大道を示す「道案内」の物語である。それは戦争に負けたとか高度経済成長で国民総生産が世界の第何位になったとかいう世間の浮き沈みで、いちいち左右されたりするものではない。昭和十六年、あの戦争の最中に書かれた、日本の詩人の中の詩人というべき吉田一穂のこの「ひばりはそらに」が、いま日本の精神的頹廃、滅亡寸前の教育の危機に、装いも新たに目の目をあびて日本の幼い人びとに（教師や父母に）送られることは、何者かの導きであるかのような驚きにつつまれて、私はそのことに深い「よろこび」を味わう。フランスのサン＝テグジュペリの「星の王子さま」が書かれたのも、悪夢のような戦乱が、ヨーロッパ世



界をおおった時期、一九四〇年（昭和十五年）にフランスがナチスに降伏して後、パイロットとしてしばらくアメリカに駐留していた同じ時期においてだった。吉田一穂の『ひばりはそらに』を無理に『星の王子さま』と関係つけて考えなくともよいかも知れないが、小さい物語ながら何か一脈通じるものが感じられる。そういう人間の、のっぴきならない状況の中でこそ詩人は、「生きる人間」のほんとうの姿を描きだすことができるのだと思う。例えば戦後二十三年、大学や幼稚園、保育所などが空前といってよいほどに大量につくられて、学校と教育とは大流行といった格好だけれども、いっほうデパートとともに、学校や幼稚園ができればできる程「いい気になった人間」が日ましにふえていく。学校や幼稚園ができて、そこで何やらもりだくさんにやっているらしいが、どこでも「生

きる」ということが「教えられ」てはいないのである。このまま流されていったら、いまに日本の子ども（大自然の子）は、せっかく生まれてきたものの、気がついてみたら、水気の枯れた（樹液の通わない）人造人間の類いになってしまっているかも知れないのである。教育も、テレビなどとともに、子どもを、「立ち枯れ病」にするために日夜すき間なく働いているらしい。おそろしいことである。こういう時機に、この『ひばりはそらに』が二十数年うもれたままできて、いまだに出る。「きんぎょみたい」に生きているいまの私たちみんなが、目のうろこがとれて、目が覚める経験をするだろう。自分の心を発見するだろう。深々とした生の息づきをとりもどすだろう。幼い人びとと一緒に、「むねをはって、こえたかく、うたいながら……」この人生を生きていこう。四月から附属幼稚園



園の園長になることになった私にとっても、この『ひばりはそらに』は、このうえないおくりものとなった。』

抜萃しようと思ひ、ペンをとめて考え、考え、結局それは耐えられず、始めの八行を除いてみんな書いてしまった。その年の夏、お茶大で行なわれた日本幼稚園協会主催の講習会で、初めて遠くから先生を仰いだ。いつもの壇上の講師とは異なり、左手を右の腕にそっとかけて恥じらいながらボソボソと語りかけるような声に、「ひばりはそらに」の小鹿の目を見るような気がして、音響効果の悪い講堂で必死に耳を傾むけた。滅多にない頭痛に襲われ椅子から立ちあがれなかったのは、窓が少く、（氷柱は三本あったが）人いぎれの為ばかりではなかったような気がする。

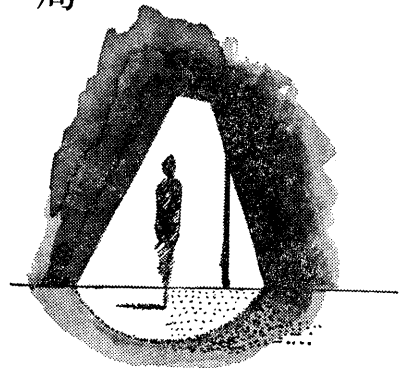
（市ヶ尾幼稚園）

* 幼児の教育第二号よりその記録を記す

オーストラリアの

プレスクールがコンピューター導入

オーストラリア広報局



今や世界はハイテク情報時代に入った。明日の世界で成功するための知識や技術や考え方をプレスクールの小さな生徒たちに今から身につけさせる必要があると、同国のリベリナ高等専門学校の教育科講師アリソン・エリオット女史は主張している（プレスクールというのは、普通は三歳から五歳児までの幼児のための学校で、義務教育ではないが国や州の奨励措置のおかげで就学率は高い。正規の教育課程に基づく学校教育の一環を成すもの

で、小学校のさらに前の段階にある学校である。公立校は授業料不要だが材料費などの実費を徴収するところもある。授業は学校によって異なるが一週間に二日から五日、一日当たり二時間から三時間行なわれる）。以下は同女史の主張の概要である。

だれでも知っているように、今われわれは技術革新の真っ只中にいる。情報は我々社会の礎石であり、情報技術の分野の今後の発展は社会的、経済的に見て二一世紀

に生きるための鍵といえよう。

技術革新の到来はどの年代の人々でも想像していたところである。「アップル」という言葉がリンゴという意味でしかない時代はとくに過ぎ去った。この技術革新の最も人目を引く産物はコンピューターである。それは、われわれの生活のほとんどあらゆる面で使われるようになった。たとえば、通商、産業、政治、各種の専門職業、家庭、さまざまな教育の場などにおいてである。

オーストラリアの初等・中等学校ではコンピューターがますます広く使われるようになってきた。オーストラリアもアメリカのように、あの学校はコンピューターを持つとか持たないとかいう時代は過ぎ去り、今やあの学校はコンピューターを何台持つべきかという時代になった。

連邦政府は国家的な規模のコンピューター学校導入計画を実施するため約一八〇〇万豪ドルを支出すると公約している。州政府と民間の教育団体もコンピューター教育計画を促進するために相当な金額を計上している。オ

ーストラリア各州の教育担当省のほとんどが、諸学校のコンピューター導入努力を助けるコンピューター・コンサルタント・チームを持つようになった。

コンピューターはほとんどの中等学校で教育課程中の重要な部分として定着し、小学校の教育計画でもだんだん重要な存在になってきたが、今や最も初期の教育段階であるプレスクールや幼稚園にもコンピューターを導入することが関心の的になってきた。

一九八〇年代にプレスクールや幼稚園に入る児童は、二一世紀には一人前の若者になる。技術革新が加速度的に進んでおり、将来これらの児童は技術が最大限に利用される情報社会に生きることになる。

これらの新技術に大きく左右されることになる今日のプレスクールの児童たちに、明日の情報社会で成功するのに必要な知識や技術や考え方を身につける機会を与えなければならぬ。

コンピューターとその関連技術に依存する社会で児童たちが立派に生きてゆくためには、教育の最初のステッ

プであるプレスクールや幼稚園の役割を重視する必要がある。
ある。

この挑戦に應えるために、プレスクールや幼稚園の先生たちは技術社会における児童のニーズに現実的に応える教育課程および教室における教育法を開発する必要がある。この開発努力を行なうに当たり、児童が単にコンピュータの操作に必要なレベルをはるかに越えた知識や考え方や理解力を身につけるように配慮すべきである。この事実をはっきりと認識しなければならない。

これからの教育にあつては、手を携えて平和に暮らす能力を持つ人間の個性の開発に焦点を当て、なにびともあまねく栄養を与え、新技術を責任をもって駆使し、われわれの環境を守ることがこれまで以上に必要となる。

価値

プレスクールの小さな子供たちを技術の世界に適応させるための教育計画では、研究心、言葉の習得、物事の

相関関係についての理解力を育てることが重要だが、それと同じ程度に個人の価値や考え方の開発も重要であることを強調しなければならない。

幼児の教師にとって最も重要な目標の一つは、子供たちが心配りのある、創造力のある、変化に対応できる（今日のようなダイナミックな世界においては変化することこそが唯一の不変な現象ではなからうか）人間に育つのを助ける方法を見つけることである。

プレスクールや幼稚園の重要な役割の一つは、教育という梯子の最初のステップとして、子供たちがコンピュータやその関連技術に大きく依存する彼らの世界に適応できるよう、手助けすることである。

自分の置かれた社会的、物理的環境の中でこうした世界について自分なりの知識を築き始めた幼児のために、プレスクールの教育計画は活発で自発的な学習をするための幅広い機会を提供している。

プレスクールの狙いは、目的意識を持ち創造力のある教師の援助と指導および児童の自由で自発的な生活とを

巧く調和させることにある。

現在行なわれているプレスクールの指導法は、子供たちが自分たち自身の学習に積極的に参加するように仕向けねばならないという信念に基づいている。プレスクールの教育課程は、人間や事物に対する経験を通じてこのような学習が促進されるようにつくられている。

このやり方を成功させるために、幼児教育に携わる教師たちは積木、音楽、動く玩具、人形、家庭用品、本や写真、絵画、素描、切り抜き、貼絵、ししゅう、演劇、建設材料、パズル、水と砂、ねり粉と粘土、木工、山登り、平衡具などを利用した創造と表現法、言語習得、研究心の育成などの教育計画を立てている。

どのプレスクールの教室でも、教師たちは、児童の探求、実験、積極的な参加を促進する環境づくりを慎重に進めている。児童たちの才能は従来の意味での「教える」行為よりも「遊ぶ」行為によって培われるものである。

児童の学習を助けるうえでのコンピュータの利用法

は教師の想像力と意欲にかかっている。コンピュータという教室の教育資源は、他の教育資源と同じく教師の熟練と感性しだいでの利用価値に大きな差が出るものである。

コンピュータをプレスクールの児童に利用するには三つの使い方ががある。すなわち、ワードプロセッサのように、物事を能率よく捌くための道具として使うこと、児童の学習を助ける家庭教師のような使い方（いわゆるコンピュータ利用学習法）、および、ロゴ言語の利用などにより児童を教える側に立たせる使い方である。

家庭教師的な使い方

一般的にプレスクールにおいては、コンピュータは家庭教師のような使い方、すなわち、児童を教える側に立たせる使い方が最も適している。コンピュータ利用学習法は、取り合わせ、仕分け、格づけ、配列、サイズの区別、形状、位置づけや方向づけ、目と手の調整、上

下左右への目と手の動き、型や色の識別、数の数え方、対応物どうしの選択、数字や文字や自分の名前の識別などの重要な基本的能力を発達させるのに利用できる。

コンピュータ利用学習法で学習中の児童は、対象物を機械的に操っているわけではない。コンピュータ学習は既存の具体的な教育経験の代わりに行なうものではなく、その経験を補足するために行なうものである。伝統的なやり方をコンピュータ利用学習法に替えてしまおうという考えに対しては抵抗する必要がある。コンピュータ

ーターは教室における教育資源の一つに過ぎない。つまり道具に過ぎない。他の道具と同じように、使い方によって児童の成長、および、能力の開発を阻害したり助長したりするのである。

コンピュータがプレスクールの教師その他の教育資源に取って替わるものだとする心配は根拠のないものである。教師の仕事という点について言えば、コンピュータで代用できるような教師なら、たぶん、もともとだれかに代わってもらわなければならない。



ニューサウスウェールズ州は、同州にあるプレスクールで行なった最近の研究計画で、三歳から五歳までの児童にコンピュータ利用学習法を試みた。この計画に基づき、プレスクールの伝統的な教室活動の一部としてコンピュータが加えられたのである。そのさい、児童たちはコンピュータが置かれたコーナーで学習する方を選んだが、それは、それまで他の場所で遊ぶのを選んだときのやり方と同じ雰囲気だった。

児童たちがコンピュータで学習するのが楽しく、また、そのソフトに興味を持っていることは容易に観察された。児童のレベルに応じたソフトなら、なんの問題もなく使用できるのである。

このプレスクールの児童たちはペアを組んで学習したがる傾向があった。一人か二人の他の児童がいつもそばにいて、コンピュータに向う仲間の動作を見つめ、学習について議論し合うのである。

児童がコンピュータを教える立場、すなわちコンピュータを生徒に見立てて使う場合には、児童は自分の

思うようにコンピュータを使用する機会を与えられる。マサチューセッツ工科大学のセイモア・ペイパート教授とそのチームが創作したコンピュータ言語のロゴが、児童が手軽に使える言語として開発されている。

ペイパートはその名著「MINDSTORMS」の中で、児童の問題解決能力は自分自身が使うコンピュータ言語の世界を通じて高めることができると断言している。プレスクールの小さな生徒でもコンピュータ言語を上手に操ることができる。児童はコンピュータに命令し教えながら、自分たちが何を考えているのかを探る作業を始めるのである。

児童のためロゴを利用する場合、スクリーンにデザインを描く「かめ」を操作するためのロゴの学習課程を含むのが普通である。「かめ」というのは監視装置と結ばれた三角形のロボットのことである。

例えば、FD一〇〇とかRT九〇というようなロゴが要求する沢山のキイを扱うことのできない幼児のために、たった一つのキイで「かめ」を動かすことができる

ように指令の言語をつくり直すことが必要である。

キイ

ニューサウスウェールズ州ワガワガにあるキャンパス・スクールの4歳と5歳の幼児たちは、なんの苦勞もなく正しいキイを探すことができた。指令用語を覚え易くさせるため、コンピューターのそばに用語表を掲げておいた。この表は「かめ」を動かすキイをわかり易く教えるものであった。例えば、前進(FORWARD)にはF、後退(BACK)にはB、右折(RIGHT)にはR、左折(LEFT)にはLといった具合である。

このプレスクールの児童たちは床上の「かめ」の動作をプログラムするのに簡易化されたロゴを使ったのである。この円いドーム状のカバーにおおわれた教室用のロボット「かめ」は、コンピューター付属のケーブルによって指令を受け、スクリーンで何が起こったかを、児童たちにわかり易く大きなサンプルとして教えるものである。

児童たちがこのロボットのプログラムづくりに馴れるに従って、教室中にファンタスティックなテーマがふくらんできた。児童たちはロボットに名前をつけ、ロボットの住む町を想像でつくり出した。ロボットに家や商店に出入りさせ、道路を歩かせたり橋の下やトンネルをくぐらせたり、お城のまわりを歩かせたりするようなプログラムを組むようになったが、こうしたことは児童たちを夢中にさせ、張り切らせている。

ベイバート教授の信ずるところによれば、幼児たちはこうした単純な指令を組み合わせて、簡単な形とかデザインから次第に複雑な幾何学的デザインをつくるようになるが、それによってさまざまな数学的概念を探求するようにになり、また、いろいろな思考を組み合わせることや組織的に思考することなど、問題解決の能力を培うことができるようになるのである。

この一〇年ほどの間にわれわれの社会は高度情報時代に突入した。幼児が自分たちにとって最も馴染みの深いものとなる技術に囲まれながら、自信を持って幸せに成

長し勉学できるように努力しなければならない。技術革新の中心はコンピューターであり、児童たちはコンピューターの世の中で立派に暮らせるように今からコンピューターの学習をしておくことが大切である。

幼児の教師たちはプレスクールのコンピューター導入を考慮するに当たり、コンピューター時代という時流に乗り遅れると世の中に取り残されてしまうと警告して父兄や教師たちを積極的に説得する報道機関の主張と歩調を合わせて前進しなければならない。

すべての教師は「技術はわれわれを救う」という主張に耳を傾け、同時に、コンピューターは現代の生活の一部であり、幼児の学習環境に貴重な貢献をなし得るといふ事実を認識しなければならない。しかし、コンピューターによる教育活動は、コンピューターの利用により総合的な教育課程の目標達成が促進される場合にのみ教育プログラムに組み入れるべきである。

コンピューターの導入はプレスクールの教育環境に素晴らしい可能性を与えるものである。しかし、コンピュ

ーターを利用することによって幼児の学習を促進し得る方法を教師が十分に知っている場合にのみ、教育課程の目標を実現するための教育資源としてコンピューターを加えることが望まれるのである。

(オーストラリア政府広報局発行の「教育ニュース」に掲載されたアリソン・エリオット女史のリポートより)

若いお母さんたちへ

はるにれの会

橋本 都

今年の夏は、いろいろな所で、子ども達と触れあう機会がありました。今まで、自分の子育てに精一杯で、その上、仕事を持ってめまぐるしく生活して来ましたが、他の子どもの姿をゆっくり眺めたり、ましてや遊んだりということは、あまりなかったように思います。それが、息子のHも小学校高学年となって、一人で大抵の事ができるようになると、自然に他の子ども達にも眼をむける余裕のようなものがでてきたようです。そして、



自分の子ばかりではなく、触れあった子ども達を愛しく思うようになりました。

実は、私は大学で少しばかり子どものことについて学び、幼稚園や小グループでの実習を通して、子どもに接してきたのですが、いわゆる子ども好きで積極的に子どもの中に入っていけるタイプではありませんでした。子どもの遊ぶのを見てるのは楽しいし、何か一緒になっ作ったりするのは好きですが、子どもってどんな事を

考えているのだろうと見ていた方だったのです。ですから、共に遊んで楽しかったと言えるようになったのは、私自身も、子育ての間に、子どもを通して少しずつ変わってきたからではないでしょうか。そうして、子ども達と遊んでみますと、一人一人の違いをあらためて確認したり反対に自分の狭い子育ての中で、困ったことだとか自分の子どもだけではないかと悩んでいたことが、普通のことであったことに気が付かされ、また新しい気分させられるのです。

ある日のこと、私は久しぶりに中学時代の友達三人と会い、楽しい一刻を過ごしました。結婚して遠い土地で暮らしている友人とは一年ぶりの再会だったので、話に花が咲きました。中学時代の友人ですから、もう知り合ってから二十年以上になります。知り合うきっかけは名簿番号が近かったぐらいなのに、それぞれに家庭を持って、こうして話ができることをうれしく思います。話の内容と言ったら、やはり子どものことが中心ですが、飾らず言いあえるのですから、とてもほっとします。

そうこうしているうちに、それまで子ども同士で遊んでいるN君がやってきて、にたっと笑い、ふざけるように、「うんこ」「おしっこ」とか言っては、我々母親達の中に入りこんできました。N君の母は「やめなさい。」とすかさず言うのですが、またやって来ては言うという行動を何度も繰り返したのでした。彼女は気になったのか、「上のお兄ちゃんはどうでなかったのに……同じに育ててもねえ……」と私達に言うのでした。私達は皆、子どもを持つ身ですから同様の経験がありますし、そう驚くことではなかったと思います。

しかし、私はこの場面がとても印象的でした。N君はダダをこねるような悪い気分ではなく、母親達の邪魔をしようとしたのでもないようです。母の眼を離れて自由に遊べるはずなのに、まだ自分の世界に没頭できない。母は子どもから離れて談笑している。そんな間において発せられた行為だったのかも知れません。

しばらくして別の友人のSちゃんがやって来ます。Sちゃんはとても利発な女の子で、息子と同じ小学校に通

っているので、作文に入賞したり、リレーの選手になったり何でもよくできるのをよく知っています。私達が子どもの話をし始めると、Sちゃんがすーっと入ってくるのです。お母さんが、慌てて、「あっち行って遊びなさい。」なんて言うと、「ここがおもしろそうだもん。」と言って母の隣に入ってしまうのです。私達の話をきいていたというより、私達も久しぶりの再会で賑かにしていましたが、普段もの静かなSちゃんのお母さんも笑っていましたので、その空気が魅力的だったのではないかと思いましたが、だから、きっとN君もわざわざ「悪い」言葉を使ったかったのではないかと思うのです。

次に私の楽しい体験を話しましょう。一週間程の間、姪（五歳）と甥（一歳半）が我が家に遊びに来ていました。台風くずれの雨の日が続き、絵本を見たり、家の中を探検して遊んでいましたが、自分の家とは勝手が違ひなかなか熱中して遊ぶことができませんでした。夕食も済んで、暗い奥の間の方へ子ども達が入っていきますと、偶然、廊下の物影が障子に映ったのです。息子Hが

小さい時にもこんな事があって、影絵遊びをやったことを思い出し、犬の形をつくってみますと、子ども達も興味をもって集まってきました。初め、暗くて恐がっていた甥も慣れて、影が次々と変わるのを楽しみました。Hもおもしろがって、大きな懐中電灯を持って来て、自分で影を作り出します。終には、自分の足を映し出して、何でしょうなどとやるものですから、幼い子ども達も真似をして、見る側になったり、やる側になったりして遊びました。時間にすると、それは三十分位でしたが、大人も子どもも楽しんだ時間でした。

影には、Hも四、五歳の頃、とても興味がありました。パジャマに着がえながら、螢光スタンドの光に照らされて、押入れに映る自分の大きな影でよく遊んでいました。「怪獣め！」などと叫んで、ポーズをとるのです。私でも居ようものなら、私の影は怪獣にされてしまうのです。自分の影でありながら、自分よりずっと大きく、力強くなるのですから変身遊びの大好きなHにはとても楽しい遊びだったのでしょう。夜、近くのスーパーまで

子どもと買物に行くことがあります。途中影踏みをして楽しんだりするのも、Hも、私も、そんな事が好きなのでですね。皆さんも、懐中電灯に手をあてて、真赤になった手をひらを見たり、オバケごっこしたことを思い出しませんか。このような楽しい体験があったから、偶然の手掛りを見つけたのではないかと思います。

次に、高校時代の友達のお宅に行った時のことです。

二番目のYちゃん（四歳）は生まれたばかりの時会っただけです。初対面のようなものでした。彼は、今日はお母さんの友達が遊びに来ると聞かされていたらしく、盛んに私の方に近づいてきてきます。「お母さんの友達？」と問いかけ、「そうよ。」と答えると安心して、しばらく、大人のまわりでテレビをみたり、うろうろしていました。そのうち、「いい事考えた。」と言って、ティッシュペーパーをまるめて、セロテープでとめ、飛ぶようにしてやって来ては、「これ何だ？」と見せるのです。うまく当たると、「当たり〜」と大声をあげ、はずれるとはずれたで、とてもうれしそうに反応します。初

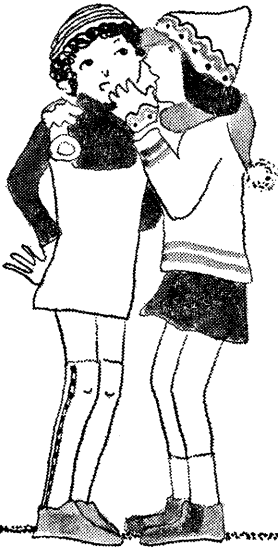
めのうちは、ヘリコプターとかよくわかるものだったのに、ストローなども使って複雑になり、ヒントを与えてくれたりします。ジュースと水を同時に飲めるストローなどをつくっては、実際試してみたりし、遊びがひろがっていききました。

お母さんは、「いつもこうなのよ。」と、ティッシュペーパーの山を見て、うんざり加減でしたが、次から次へと出てくるひらめきに、私もあてるのがとても楽しかったのです。息子のHも、ティッシュや、その他の紙を毎日随分使うので、紙代は出世払いにしてもらわなくてはと冗談に言うほどでした。Hもみてみるとよく見せにくるのですが、ほとんど何か家事をしているので、生返事になりやすいですね。お母さんというのは、子どものやっていることを「いつものこと」のような気になってしまふのです。こうして、他の子どもと接してみると、自分の子どもへの接し方はいい加減で手抜きがあるなど反省させられるのです。例え、遊んだにせよ、心から楽しむというより、遊んであげなければという考えが先に立つ

ていたように思いました。

私は、子どもと遊ぶ中で、私達自身も体験した楽しい体験を伝えたいと思いました。その一つは古くからの行事にまつわることです。二月の節分、五月の子どもの日など、幼稚園でも作品を仕上げたり行事を行うところも多いでしょう。私の住む地方では節分のお豆は大豆ではなく落花生を使います。余った落花生をイヤリングにして遊んだりしたことを、その軽い痛みと共に思い出します。端午の節句は旧暦の頃、町のお店で一斉に菖蒲とよ

もぎが売られます。菖蒲湯独特の香りも、私は好きでした。七夕、十五夜、落葉たき等々、次々と出て来ますね。十五夜の時は近くの山へススキを取りに行つて、白玉粉でお団子をつくつて、栗の一枝をとつて、月を家族でながめます。やっぱりウサギが住んでいるような、大きく幻想的な世界です。特に都会では、このような行事がだんだんなくなつてきているといえます。でも子どもとの生活の中に、このようなことがあると、メリハリがつくというのでしょうか、とても楽しくなると思うので



す。そして同時に我々大人も同調して楽しめるのではないでしょうか。

そして、もう一つの伝えたいことは、自分自身が育った時のことです。今では、三十年前にどんな楽しいことがあったかなど、すぐには思い出せないのでありますが、我が家では、母を中心によく歌を歌ったように思います。

さて、私の子育てで、一番頭から離れなかったことは、息子のHが一人っ子であるということです。決して望んだわけではないのにそうなってしまったのです。家庭状況を知らない方は、一人っ子は可愛想だとか、よくないと言います。しかし、一人っ子であることは変えられない事実なのです。「一人っ子だから……」ということはないのだと思いつながら、私のまわりにいる、一人っ子を持つお母さんの話を特に注目して聴いたり、本やいろいろの情報の中で、「一人っ子」という言葉を聞くとき、敏感に反応したものです。

H自身も、一人であることが不満でもあったでしょう。友達が弟や妹の話をするのをきいてきたり、保育園

で、幼い子どもと触れあい、「赤ちゃんほしいな。」と言ったこともありました。私にはできるだけ丁寧な答えてわかってもらおうしありませんでした。

できるだけ意識しないで育てようと思いつながら、つい「一人っ子だから」他の子どもと仲良くできるようにという思いが強くなるのです。そして、どんな友達ができただかということが、大人達にはとても心配なことでした。家の中では激しくぶつかることはないかわり保育園で友人とふざけあって、肩のあたりを縫うほどの怪我也しました。近所の家のまわりでオニごっこして、迷惑をかけて叱られたり、買いたい物を覚えたりとハラハラすることがありましたが、いくつかの約束事……帰宅時間を守ることを、遊ぶ所をはっきりさせること等を守らせてみていました。そうすると、夜寝る前のわずかな時間に、楽しかったことなど、教えてくれますし、友人の名もだいたいつかめました。それでも、年上の子どもが遊びに来ると悪影響はないかと神経質に考えたものです。今では友達は多いほうですし、年上でも年下でも楽しく遊ん

でいるようで、一安心といったところです。

しかし、おもしろいことに、Hはどんなに楽しく友達と遊んでも、一人の時間がほしいようです。保育園の時も、架空の友人をつくって、一人、部屋に閉じこもって遊んでいました。それに、今でもそうですが、自分の姿を鏡にうつすのが好きなのです。小さい頃は、格好いいスタイルをしてポーズをとって、とっくりと見ていました。知らない間に私の三面鏡を使っているらしく、度々開いたままになっているのです。こうなると、一人っ子だからこうなのだというより、Hはこのような生活のパターンが好きだという個性の問題であるように思われるのです。

今、Hは卓球部に入っていますが、他の小学校の生徒と気軽に声をかけあっているのを見ると、仲良く遊べるようにと念じていた私自身が滑稽に思えるのです。

話は変わりますが、Hは幼い頃から意志のはっきりした子どもでした。いわゆる二、三歳頃の「反抗期」の頃は何でもいやだと主張していました。Hのおへそは一八

〇度曲っているのではないかと冗談を言うこともしばしばでした。意地っばりで、私にそっくりだなんて、呆れ顔でよく言われたものです。保育園でのお遊戯などもともにやったことはありません。年寄りからすると、言うことをきかない素直でない子どもでした。でも、その代わりといってよいのでしょうか、自分でやりたいことははっきり伝えるのでした。初めのうちは、大人の言うことに従わないで、とても疲れたのですが、一息ついてみると我がままなことばかりではないようにみえました。せっかく、やろうと思っているのに大人がまわりで何度もたたみかけてせかしたりすると、途端にへそ曲りの悪い癖が出てくるのです。かえって知らんぷりをしていると、「僕やるから」と宣言し、実行するのです。小学校の高学年になった今では、こちらも上手になってきました。例えば、髪が伸びてきたので散髪に行きなさいというところを、いつ行くの？と聞くのです。すると自分でいろいろ考えて土曜に行くと言うと、それまでは祖母に言われようと絶対だめなのですが、必ず、土曜日

に行ってくるのです。

まだまだ、子どもを育てる毎日にはいろいろ困ったことがあったと思います。でも、十年以上のかかわりを経て、子どもの持つて生まれたものをそのまま受けとることもが、少しできるようになったのではないかと思います。そして、心から楽しめるようになりました。

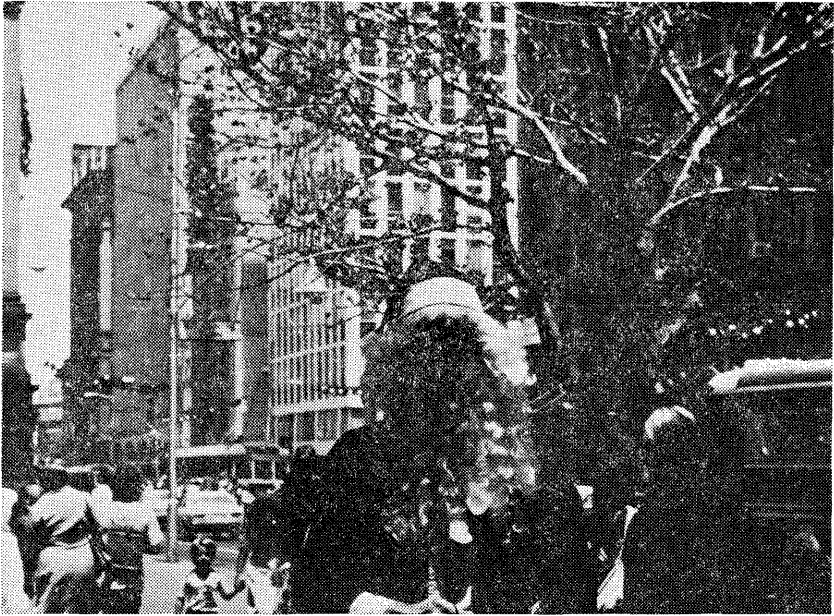
今日も、夜、自分で決めた寝る時間が来ました。そろそろ寝るのかなと思っていると、突然、甘えた声で「ママーっ、子守歌！」と呼びます。昨日は、私の掛け布団と自分のとを交換してもらったのに、きょうは、やっぱり自分の布団がいいと、元に戻しました。「子守歌は自分で歌ってごらん。」と言うと、感情をこめて歌います。ほめるとやがて眠ってしまいました。このところ毎日のように子守歌にこだわっていて、一人で時々、ピアノでメロディーを弾いたり、たて笛を吹いたりしています。私はいつまで続くかわからない、こうした子どもとのやりとりを大切にしていきたいと思いました。

随分とりとめのないお喋りをしてしまいました。皆さ

んも、サンタの宝物探しゲームをやって遊びませんか。たくさんの子どもと大人が、どんなゲームをつくって遊ぶか、楽しい一刻を過ごすか、楽しみです。

夏のクリスマス

小澤 誉 子



オーストラリアのクリスマスは、十一月にはいると始まる。各デパートを中心に、クリスマスモードが高まってゆく。

メルボルンの街も、その中央を走るスワンストリートには、色とりどりのモールが飾られ、タウンホールの広場には、大きな木が立てられる。赤や黄色、金や銀の飾りが夏の強い日射しに照らされて、キラキラと感ぜられるほどになる。

オーストラリアのクリスマスは、真夏の最大のイベントなのだ。クリスマスは、サマーホリデイの開始を告げる一年のうちで最もはなやかであり、楽しみな行事である。

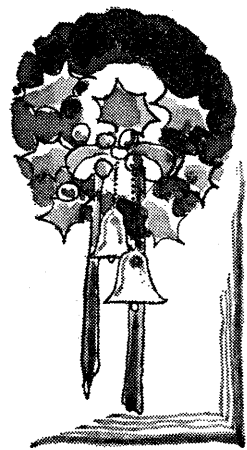
Tシャツやサマードレスの人々がクリスマスツリーの下を歩く。冬のクリスマススになれている私の眼には、そのツリーの色とりどりのかざりが、まるで、七夕の飾りのようにうつる。

オーストラリアは、元は英国植民地だ。一九八八年が建国二百年に当る、アメリカよりも、若い国である。しかし、アメリカが、その独自の個性的な文化を創造したのに比べると、オーストラリアは、未だイギリスの文化を色濃く残している国といえる。特に、オーストラリアでも長い歴史を誇るメルボルンは、一九〇一年に連邦政府が設置され、その後、首都がキャンベラに移るまで、政治・文化の中心だったことから、イギリスのふんいきを強く漂わせている。レンガ造りの建物や緑豊かな公園は、まさにロンドン郊外を思わせる。

そんな街でのクリスマスは、にぎやかとは言え、日本の商業ベースのみ先行するクリスマスとは、根本的に違っている。もちろんクリスチャンの数も多く、宗教的な色彩が濃いのはもちろんだが、クリスマス自体の伝統の

差を感じさせる。

デパートの中で目をひくのは、クリスマスカードの多さだ。伝統的なデザインやオーソドックスなデザインの中に、オーストラリアらしさを強く打ち出したカードが、最近多くなったのは、オーストラリア自身の文化を打ち出そうとする積極的な姿勢と、国自体が、いつまでも、イギリス色をひきずるのではなく、オーストラリア独自の文化に自信を持ってきたためだろう。カンガルー



が赤いサンタクロースの衣装を着て、水上スキーをやっているものなど、夏のクリスマスを楽しんでいる心がかがえる。

数年前だと思うが、郵便局がクリスマスの記念切手を作った。そのデザインは、水着を着たサンタクロースが、サーフィンに乗っている姿である。そのコミカルなデザインは、人気を呼んで「オーストラリアのサンタクロースは、サーフィンに乗ってやってくる」と子供たちが信じたほどだ。

ところで、ここで、オーストラリアのクリスマスの絵本を紹介しよう。

ストーリーは、ひとりの女の子が、クリスマス近くの日、ふとサンタクロースは一体どこからやってくるのかという疑問をもつ所から始まる。サンタクロースは、ソリにのってやってくるとその女の子の読んだ本には書いてあった。しかし、オーストラリアのクリスマスは、夏のさかりだから、雪など降ろうはずはない。そこでもしかしたら、サンタクロースは、来ないのではないかと不



安になるのだ。それに、ヨーロッパなど、北半球を中心に活躍するサンタクロースが、南半球まで、本当にやって来てくれるのだろうか、そのことも一層彼女を不安にする、という話だ。

この本は、とてもオーストラリアの子供たちの気持ちを表わしているのではないかと思う。というのは、クリスマスのお話は、ほとんど雪に関わりをもっている。クリスマスキャロル、マッチ売りの少女などは、その代表だが、その他の話でも、クリスマスの場面は、冬であり、赤々と燃えるマンツルピースやキャンドルが、登場する。つまり、クリスマス文化は、すべて北半球で作られているのだ。したがって、南半球の子供にとって、クリスマスに雪が降るなどということは、とても想像できない。しかし、十二月二十五日になれば、夏であろうとクリスマスはやってくる。そこに子供たちは、ギャップを感じる。切手が子供たちに人気だったのも、サーフィンの方が、ソリよりも、オーストラリアのクリスマスにマッチしていたためだろう。



こんなことを言っただけで、オーストラリア人の気分を害してしまいかもしれないが、オーストラリアという国は、どうも国際的な舞台では、目立たない地味な国である。日本人の中にも、未だ、オーストラリアとオーストリアの区別のつかない人がいるほどだ。

最近の円高で、オーストラリアに行く日本人旅行者数は急増した。ハワイに次いで、最近人気のハネムーンコースとして、若い人の注目を浴びている。しかし未だに、そのイメージは、カンガルーとコアラの国というものであり、その文化より、自然が、イメージの中心となっている。



地味な目立たぬ国という淋しさを、オーストラリア人自身、心の中のどこかに持っているように思えてならない。これは、三年間オーストラリアに生活して感じたこ

となのだ。

このストーリーの女の子が、サンタクロースに忘れられないかと思うのは、まさに、この心境からではないかと思う。

この女の子のみならず、私自身、オーストラリアに生活すると、季節の違いから、ファッションも半年遅れてしまう。そして、すべての文化などの流れが、北半球を中心に展開されていることを感じざるをえない。季節の差がこれほど大きいものとは、それまで考えもしなかったことである。

デパートの中に「ホワイトクリスマス」の曲が流れている。「夢に見るホワイトクリスマス……」という詞を口ずさみながら外に出ると、真夏の強い太陽が、肌に痛いほどだった。



幼児の教育 第八十五卷 (昭和六十一年) 総目録

○一号

保育の実践と理論を求めて 津守 真
 S F 的読み解き 第十回 子どもとの古
 今集 堀内 守
 初めての子どもたちとの出発 松藤章子
 アメリカの幼稚園に通って 平田純子
 再び保育の中の小さなこと、大切なこと 守永英子
 若いお母さんたちへ ゆだねつつ育てる
 ということ はるにれの会 入江礼子
 兎園随筆 白い文字 蕪木寿江
 子どもたちのこと ザリガニの赤ちゃん
 生まれたよ 大橋利恵子

「非知」と「非力」に希望を見る M H
 自己発達と泣きべそ 榎沢良彦

○二号

パッションとトボス 河邊 杲
 保育の実践と理論を求めて 津守 真
 S F 的読み解き、子どもという風景
 第十一回 ウォッチング 堀内 守
 雪ん子たちの冬 水野恭子
 幼年時代の演劇体験 富田博之
 子どもたちのこと「ぼくの家 まだ夜」
 大橋利恵子

やけど 中谷喜久子

兎園随筆 痛いの痛いのとんでいけ

若いお母さんたちへ 幼稚園探しをめぐ
 って はるにれの会 榎田二三子
 蕪木寿江

○三号

「名前」—私になること— 佐藤文字
 保育の実践と理論を求めて インドへの
 旅① 津守 真
 幼児と演劇をめぐって 幼児の演劇教育
 の出発 富田博之

兎園隨筆 痛いの痛いの飛んでいけ

虹を見せて下さい

蕪木寿江

東京の郊外化―「榆家の人びと」の空間
を読むために

遠藤はる美

斜めから教えられた教師像 赤羽美代子

三歳 すみれ物語―自立への道のり―

村松三恵子

若いお母さんたちへ

はるにれの会

拾いもの命

渡部みさ子

二ヶ月間

福島千恵

育児期の母親の主婦的状況について

菅野慧理子

○四号

国際平和年を迎え幼児教育を考える

荘司雅子

保育の実践と理論を求めて

津守 真

インドへの旅②

斎藤芳子

幼児と共に五十年

堀内 守

S F的読み解き 子どもという風景

第十二回 ダ行の夢想 堀内 守

兎園隨筆 痛いの痛いの飛んでいけ

ぶどう 一ツ 二〇〇えん 蕪木寿江

子どもの遊び E・A・Aフェルメール

浜口順子訳

子どもたち―春・夏・秋―

古屋あこ

若いお母さんたちへ デンバー生活の体

験より はるにれの会 塚田幸子

○五号

伝承ゲームの国際会議に出席して

中村悦子

蔵前の保母養成所をたずねて 土屋とく

S F的読み解き、子どもという風景

第十三回 音無しの構え 堀内 守

幼児と共に五十年 両親教育をめぐ

つて 斎藤芳子

兎園隨筆 痛いの痛いの飛んでいけ

「大事なものはお友達なの？僕知らな

った」 蕪木寿江

いろいろなことを教えてくれる子どもた

ち 村石京子

若いお母さんたちへ はるにれの会

犬になった子どもたち 向山陽子

保育の実践と理論を求めて 国吉 栄

存在とリズム 津守 真

○六号

保育の現在の性格

津守 真

S F的読み解き、子どもという風景

第十四回 夕べさびしい町はずれ

堀内 守

幼児と共に五十年 戦時中の保育と教材

斎藤芳子

兎園隨筆 痛いの痛いの飛んでいけ

お羊の森 蕪木寿江

子どもの遊び E・A・A・フェルメー

ル 浜口順子訳

若いお母さんたちへ 不便のすすめ

はるにれの会 山本直子

蔵前の保母養成所をたずねて―明治・大

正の教育界の動き 土屋とく

なぜ実践の保育研究か―現象学的保育研

究を目指して― 榎沢良彦

○七号

ねこふんじゃった

永田栄一

幼児と演劇をめぐって 倉橋惣三の演劇

教育論 富田博之

S F的読み解き、子どもという風景

第十五回 儀式のあとで 堀内 守

インドネシアの子どもたち 近藤伊津子
蔵前の保姆養成所をたずねて―埋れているもの― 土屋とく

子どもの遊び E・A・A・フェルメー
ル 浜口順子訳

若いお母さんたちへ はるにれの会

美谷島いく子

四隅を結ぶ描画の世界

津守 真

○八号

緑蔭図書紹介

「八月六日から一五日」を語りつぐこと

中村悦子

ごっこからファンタジーへ・他

村石京子

魔法使いのチョコレート・ケーキ

森下みさ子

「光の小鳥」をつかまえるために

国吉 栄

SF的読み解き 子どもという風景

第十六回 指の年代記

堀内 守

子どもの遊び E・A・A・フェルメー
ル

浜口順子訳

「子どもへの愛」の社会学

山田昌弘

若いお母さんたちへ、我が家の朝

はるにれの会 宮里陸美

子どもの自己実現と保育者の自己実現

津守 真

○九月号

「家庭科」学習を高校での必修に

岡田正章

SF的読み解き 子どもという風景

第十七回 ああ名前

堀内 守

古沢頼編「見えないアルバム」を読む

津守 真

きたがわてつ・林容子著「美土里くん、
ありがとう」を読む

中村弓子

中村妙子訳「サンタクロースっているん
でしようか」を読んで他、

向山陽子

子どもの玩具環境を考える―歴史的観点
から―

渋谷 寿

子どもの遊び E・A・A・フェルメー
ル

浜口順子訳

若いお母さんたちへ

はるにれの会 川上美子

○十号

「遊び」論議をめぐって

SF的読み解き 子どもという風景

第十八回 まなざし学の素描

堀内 守

子どもの遊び E・A・A・フェルメー
ル

「子どもへの愛」の社会学

山田昌弘

蔵前の保姆養成所をたずねて―初期の保
育者養成―

土屋とく

「ひみつのひみつの」

牛山佐智恵

自然とのふれあい

斎藤芳子

うさぎぐみ音楽会を終えて

青木裕子

若いお母さんたちへ 引越という名のハ
ードル

はるにれの会 入江礼子

○十一号

世界の幼児保育者との協力―世界幼児教
育機構 世界大会に参加して

津守 真

SF的読み解き 子どもという風景

第十九回 お店屋さんごっこ

堀内 守

自然とのふれあい―草餅つき―斎藤芳子
子どもの遊び E・A・A・フェルメー
ル

「子どもへの愛」の社会学

山田昌弘

兎園隨筆 痛いの痛いの飛んでいけ

就学ということ 蕪木春江

メイド・イン・神様の子どもたち

山下史路

若いお母さんたちへ がんばれ三人組

母さんたちの応援歌

はるにれの会 友定啓子

○十二号

保育における「対等の対応」について

高橋さやか

いつもと変わらずに

津守 真

S F的読み解き 子どもという風景

第二十回とりかえはや物語 堀内 守

自然とのふれあい―秋のみり―

斎藤芳子

再び、保育の中の小さなこと、大切なこと

守永英子

兎園隨筆 出会い―ひばりはそらに―

蕪木寿江

オーストラリアのプレススクールが、コン

ピューターを導入 オーストラリア広報

局

若いお母さんたちへ

はるにれの会 橋本 都

小澤誉子

夏のクリスマス
第八十五卷 総目録

十二月号 ◎

定価四〇〇円

昭和六十一年十一月二十五日 印刷

昭和六十一年十二月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一―一九六四〇橋

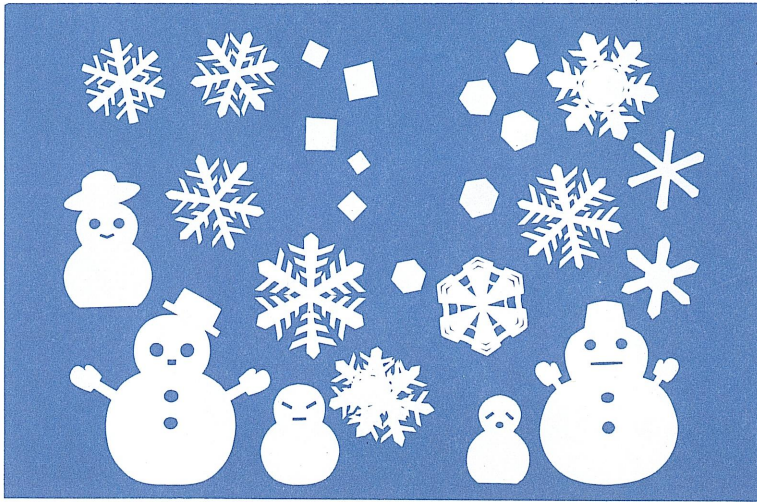
◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

*万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

保育が楽しくなる

四季の切り紙

安達佑子・著 B5判・128頁・定価1,600円



絵で見えてすぐに教えられる
切り紙指導の入門書

好評発売中!!

- 切り紙は、子供たちに指先を使って物を作ることを体験させ、さらに知的発達を促す効果も大きい、理想的な製作遊びです。また、その季節に題材した切り紙で保育室を飾って、いっそう明るい雰囲気を盛り上げるのも楽しいものですね。
- 本書は、〈花火〉〈赤とんぼ〉〈雪〉〈ひなまつり〉などなど、四季折々のテーマごとに作り方のポイント／ヒント／作品の飾り方を解説した切り紙指導の入門書です。イラストを豊富に使った解説は、紙工作にまだあまり慣れていない方にもわかりやすく、また題材もかんたんにできるもので構成しました。
- 資料として、切り紙の歴史、切り紙の基本的な理論、子供たちに初歩から指導していく際の具体的な方法なども備え、切り紙研究・指導者として現在活躍中の著者の知識と経験が全編に込められております。

内容

四季を切る

- さくら
- チューリップ
- ちょうちょ
- こいのぼり
- しゃぼん玉
- あじさい
- 海
- 花火
- 赤とんぼ
- クリスマス
- 雪
- ひなまつり

折り方とその作品

各折り方の説明とその作品

資料編

- 切り紙の歴史と生活とのつながり
- 折った角度・面の数
- 多角形のつくり方
- 指導の実際

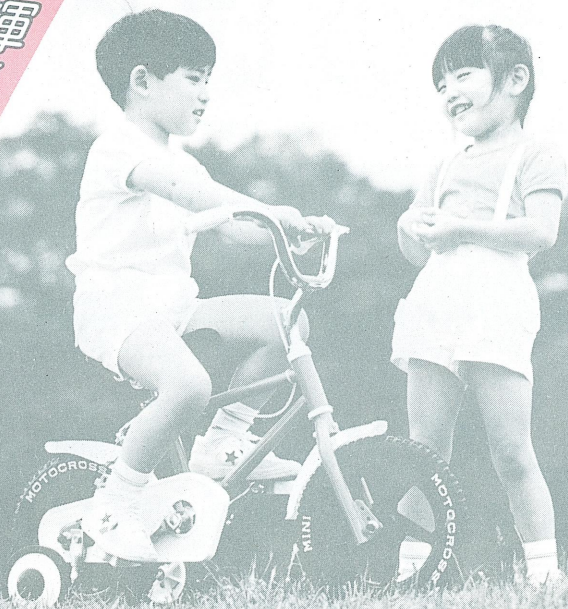


くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

な た 輝
つ ち く
て は 光 の
… 風 中、
に 子 ど も



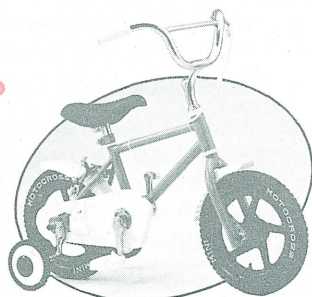
新発売

子どもたち待望の
モトクロスタイプ。

安全に乗りこなすためのニュー二輪車デビュー。

園用自転車

キンダーサイクル<BMX>
¥14,000

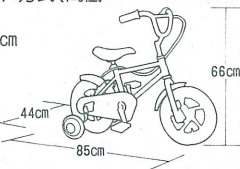


●安全のため、一般公道や急坂での遊びは、やめましょう。園庭など安全な場所でご使用ください。

- 園用に特別に開発・設計されたモトクロス仕様の補助輪つき二輪車です。
- チェーンカバーや、後輪ブレーキの採用など安全性を重視した配慮が各所に活かされています。
- 堅牢な造りのボディ構造。タイヤはノーパンクタイヤを使用しています。

色：グリーン
材質：ボディ/鉄製(焼付塗装) 車輪/ゴム製ノーパンク
タイヤ サドルシート/プラスチック製
仕様：サドルシート/アジャスト方式(高低
・角度調整可能)
寸法：全長85×全幅44×全高66cm
付属品：補助輪2、スパナ1

※モトクロスタイプなので、フリーホイールを使用しない、ペダルクランク・後輪直速動式です。



くわしくはプレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの